

陸雲詩研究

—「為顧彥先贈婦往返四首」を中心に—

【キーワード】陸雲、陸機、二陸、西晋文学、顧彥先

はじめに

西晋の陸雲（二六二～三〇三）は、兄の陸機とともに「二陸」と称され、西晋時代を代表する文人の一人である（注①）。

鍾嶸の『詩品』は、五言詩の歴史を記し、各代の作家に評価を加えているが、その序の中で、西晋の太康年間（二八〇～二八九）は、曹操父子を中心に所謂「建安の七子」が活躍した建安年間（一九六～二一九）に次ぐ五言詩の第二の隆盛期であるとして、次のように言う。

太康中、三張二陸、両潘一左、勃爾俱興、踵武前王。風流未沫、亦文章之中興也。

太康中、三張・二陸、両潘・一左、勃爾として俱に興り、武を前王に踵ぐ。風流未だ沫まず、亦た文章の中興なり。

佐藤利行・閔金鐘

すなわち、「太康年間になって、三張・二陸、両潘・一左らの詩人が、にわかには輩出して、建安の盛時を受け継いだ。風雅な伝統は失われることなく、ここに文学（五言詩）の中興を迎えた」と述べる。ここに言う「三張」とは張載・張協・張亢の三兄弟、「二陸」は陸機・陸雲兄弟、「両潘」とは潘岳とその従子の潘尼、「一左」は左思を指す。これらの文人が、建安以降に衰微していった五言詩を再び隆盛にしたと云うのである。

次に劉勰の『文心雕龍』明詩篇を見てみよう。劉勰は晋代の詩について次のように述べている。

晋世羣才、稍入輕綺。張左潘陸、比肩詩衢。采繆於正始、力柔於建安、或析文以為妙、或流靡以自妍。此其大略也。江左篇製、溺乎玄風、嗤笑徇務之志、崇盛亡機之談。袁孫已下、雖各有雕

采、而辭趣一揆、莫与争雄。所以景純仙篇、挺拔而為俊矣。

晋世の羣才は、稍や輕綺に入る。張・左・潘・陸は、肩を詩衡に比ぶ。采は正始よりも縝にして、力は建安よりも柔に、或いは析文以て妙と為し、或いは流靡以て自ら妍とす。此れ其の大略なり。江左の篇製は、玄風に溺れ、徇務の志を嗤笑し、亡機の談を崇盛す。袁・孫已下、各おの彫采有りと雖も、辭趣は揆を一にして、与に雄を争ふもの莫し。景純の仙篇、挺拔して俊と為る所以なり。

すなわち、「晋の世の作家たちは、(その作風が)次第に柔弱の美に流れていった。張(載・協・亢)、潘(岳・尼)、左(思)、陸(機・雲)らが、肩を詩壇に並べたが、文飾は正始時代よりも華麗で、気力は建安よりも柔弱。分析的に文辞を細かくすることを巧妙と考える者もあり、文辞を流麗にすることを美しいと考える者もあった。これが西晋時代のあらましである。東晋時代の作品は、老荘の思想に溺れた結果、真面目に世事に務める精神をさげすみ、清談を崇んだ。袁宏・孫綽をはじめとする作品には、それぞれに形式的な美しさは有るけれども、その内容は画一的で、これといった勝れたものは無い。郭璞の『遊仙詩』がひととき優れているとされる所以は、ここにあり」という。

劉勰は西晋の代表的な文人として、「張」すなわち張載・張協・

張亢、「左」すなわち左思、「潘」すなわち潘岳・潘尼、「陸」すなわち陸機・陸雲らを挙げ、「迫力は建安時代よりも柔弱で、文辞を細かく分析することを巧妙と考えたり、文辞を流麗にすることを美しいと考えたりする者がいた」と言っている。

また、劉勰は漢代から宋代に至るまでの詩風の変遷状況を概観しているが、そのうち晋代の詩風については、「晋世の羣才は、稍や輕綺に入る」と、晋代の文人たちは、次第に繊細微弱の美を追い求めるようになってゆき、建安の頃の「慷慨以て氣に任じ、磊落以て才を使ふ」が如き風の無くなったことを、その特徴として捉えている。

このように、鍾嶸の『詩品』、劉勰の『文心雕龍』では、陸雲は兄の陸機とともに西晋を代表する文人として捉えられている(注②)。今回は、陸雲の「為顧彦先贈婦往返四首」を取り上げ、その内容を詳細に見て行く。今後、他の陸雲詩をも丹念に読解して、陸雲詩の特徴を探ってみたい。

陸雲の生涯

陸雲の詩を検討する前に、先ずは陸雲の生涯を振り返ってみよう。

陸雲は、呉の大司馬であった陸抗(二二六～二七四)の第五子として、永安五年に生まれた。そもそも陸氏は呉郡の名門で、抗の父、

すなわち雲の祖父にあたる陸遜（一八三～二四五）は、呉国の中心的人物であった。

陸抗は鳳皇三年（二七四）秋、病のために卒し、抗の長子の晏が後を嗣いだ。その後の様子について、『呉志』陸抗伝には次のように記されている。

（陸抗、鳳皇三年）秋遂卒。子晏嗣。晏及弟景・玄・機・雲、分領抗兵。晏為裨將軍・夷道監。……景字士仁。以尚公主拜騎都尉、封毗陵侯。既領抗兵、拜偏將軍・中夏督。澡身好學、著書數十篇也。

（陸抗は、鳳皇三年）秋、遂に卒す。子の晏嗣ぐ。晏及び弟の景・玄・機・雲は、抗の兵を分領す。晏は裨將軍・夷道の監と為る。……景、字は士仁。公主を尚るを以て騎都尉に拜され、毗陵侯に封ぜらる。既に抗の兵を領し、偏將軍・中夏の督に拜せらる。身を深め學を好み、書數十篇を著すなり。

すなわち、父抗の死後、その兵を晏・景・玄・機・雲の五子が分割し統率したのである。

ここにあるように、第二子の景は學問を好み、相当な文章家であったようである。この記述の後の裴松之注に引く『文士伝』には、

陸景母張承女、諸葛恪外生。

陸景の母は張承の女、諸葛恪の外生なり。

とある。もし、抗の六子（雲の下には「耽」という弟がいる）が同生の子であるとするならば、雲の母は張承の娘ということになる。張氏とは呉の四姓（朱・張・顧・陸）の一つで、呉国にあつては名門であり、張承の父の張昭（『呉志』七）は『春秋左伝』に通じた學者でもあり、孫策の長史・撫軍中郎將となり、その創業に貢獻し、孫権の下では輔呉將軍となつた呉の重鎮である。兄の景・機および雲が、學問にすぐれ文章の名手であつた所以は、あるいは張昭の血を受け継いだものであつたのかも知れない。

少年時代の陸雲については、『晋書』本伝に、

六歲能屬文。性清正、有才理。少与兄機齊名、雖文章不及機、而持論過之。

六歳にして能く文を屬る。性は清正にして、才理有り。少くして兄の機と名を齊しくし、文章は機に及ばずと雖も、持論は之に過ぐ。

とある。陸雲がわずか六歳にして文章をつづることができたという点については、『世説新語』賞譽篇注に引く『陸雲別伝』に次のように記されている。

雲字士龍。吳大司馬抗之第五子、機同母之弟也。儒雅有俊才。容貌瓌偉、口敏能談。博聞強記、善著述。六歲便能賦詩、時人為項託・揚鳥之疇也。

雲、字は士龍。吳の大司馬抗の第五子にして、機の同母の弟なり。儒雅にして俊才有り。容貌は瓌偉、口は敏にして能く談ず。博聞強記にして、著述を善くす。六歳にして便能く詩を賦し、時人は以て項託・揚鳥の疇と為すなり。

すなわち、幼い頃から学問が深く俊才であり、容貌も立派で弁論にもすぐれ、博聞強記で著述をよくした。六歳にしてうまく詩を作り、当時の人々は、雲のことを項託（七歳で孔子の師となった項襄）・揚鳥（揚雄の子）のたぐいのごとき神童であると思ったという。

先にも述べたように、吳の名門の家柄の生まれ、幼くして学問にも優れ器量も立派であった雲は、さぞかしその将来を囑望されていたことであろう。

『晋書』本伝には、

幼時、吳尚書広陵閔鴻見而奇之曰、「此兒若非龍駒、当是鳳雛」。

後拳雲賢良、時年十六。

幼き時、吳の尚書広陵の閔鴻は見て之を奇として曰く、「此の兒は若し龍駒に非ざれば、当に是れ鳳雛なるべし」と。後に雲を賢良に挙げ、時に年十六なり。

とあり、雲は十六歳の時に閔鴻によって賢良にとりあげられた。

やがて陸雲が十九歳の時、西晋の太康元年（二八〇）に、吳は滅亡した。吳国の滅亡は、そのまま陸氏一族の滅亡でもあった。吳の鳳皇三年（二七四）、父抗の亡き後、父の兵を分領していた抗の五子のうち、長子の晏は吳の天紀四年（二八〇）、西晋の龍驤將軍王濬の別軍に殺され、次子の景もまた害に遇ってしまった。時に景は三十一歳、機は二十歳であった。

二人の兄を相次いで亡くした機雲兄弟の悲しみは、いかばかりであったか。吳の滅亡、血を分けた兄の死、こうした悲痛なる経験をした機雲兄弟は、その後、旧里の華亭におよそ十年間、退居することとなった。『晋書』本伝には、

退居旧里、閉門勤学、積有十年。

旧里に退居し、門を閉ざして学に勤め、積みて十年有り。

とあり、陸雲は兄の機とともに学問に精励したものと思われる。

太康の末年（二八九）、陸雲は兄機と相前後して入洛した。洛とは晋の都であった洛陽のことである。長く辛い旅を続け、やっとの思いで洛陽に到着した機雲兄弟は、まず張華（二三二～三〇〇）の許を訪れた。当時、張華は晋王朝にあって政界・文壇の中心的人物

であった。『晋書』陸機伝には、この時の様子が次のように記されている。

造太常張華。華素重其名、如旧相識。

太常の張華に造る。華は素より其の名を重んじ、旧より相ひ識るが如し。

また、同じく『晋書』張華伝には、

初陸機兄弟志気高爽、自以呉之名家。初入洛、不推中国人士。

見華一面如旧。

初め陸機兄弟は志気高爽にして、自ら呉の名家なるを以てす。初め洛に入り、中国の人士に推らず。華を見て一面旧の如し。

とあるように、張華は機雲兄弟に会うや、たちまち意気投合したのであった(注③)。すっかり二人のことを気に入った張華は、「伐呉之役、利獲二俊(呉を伐つの役、利は二俊を獲たり)」と言ったという。多くの洛陽の人士が、陸機陸雲兄弟に冷淡であった中で、張華はまさに二人の才を高く評価し、好意的に二人を迎え入れたのであった。

張華は陸兄弟をしばしば高官たちに推薦した。太傅の楊駿は陸機

をとりたてて祭酒とした。一方、陸雲は刺史の周浚に召されて従事の官に就いたが、周浚は雲のことを、「陸士龍、当今之顔子也」(陸士龍は、当今の顔子なり)と、雲のことを孔子の高弟であった顔淵に譬えて賞賛したのであった。

陸雲は、ほどなくして公府の役人のまま太子舍人となり、浚儀県の令となつて赴任した。浚儀県は人々の多く集まる要地であり、治めるのが難しい県であると評判であったが、雲が令となつて赴くや、「下は欺く能はず、市に二価無し」という具合であった。『呉志』陸抗伝の注に引く『機雲別伝』には、

雲為呉王郎中令、出宰浚儀。甚有忠政、吏民懷之、生為立祠。

雲は呉王の郎中令と為り、出でて浚儀に宰たり。甚だ忠政有り、吏民は之に懷き、生けるときに為に祠を立てり。

とある。

元康元年(二九二)に、陸機は愍懷太子の洗馬となり、尋いで元康三年(二九三)ごろ、著作郎に転じている。

時に恵帝賈后の甥として絶大なる権力を有していた賈謐(？)三〇〇)の「二十四友」に機雲兄弟は加わることとなる。文学を好んでいた賈謐は、当代一流の文人達をみずからの下に集め、一個の文学集団を形成していた。これが所謂「二十四友」である。

やがて浚儀県の令を辞した陸雲は、元康四年(二九四)に、兄の機とともに呉王晏の郎中令となった。この時、雲は三十三歳であった。

そもそも呉王司馬晏(『晋書』卷六四「武十三王伝」)は、武帝の子で、太康十年(二八九)に呉王に封ぜられ、のち射声校尉、後軍將軍を歴任した人である。その人となりは、慎み深いものがあつたが、才能は人並み以下で、武帝の二十六人の男子の中で最も劣つていたと言われている。こうした人物に仕えた機雲兄弟の苦勞は、相当なものであつたと想像される。

機雲兄弟は、入洛してから折に触れては故郷を懐かしみ、機会があれば呉に帰りたいという思いを持つていたようである。そうでは無いと願いを叶える機会であつたといえよう。しかし、実際に呉に赴任した二人にとって、その生活は決して満足できるものではなく、更に凡庸なる晏に仕える苦勞も、相当なものであつたと想像できる。

やがて元康六年(二九六)、陸雲は再び入朝して尚書郎・侍御史・太子中舍人・中書侍郎となった。兄の陸機も同じ年に尚書中兵郎に遷り、殿中郎に転じた。

その後、趙王倫が政治を補佐するや、陸機は招かれて相国參軍となった。

ところで、機雲兄弟の後楯として二人を暖かく見守ってきた張華

は、趙王倫が賈后に諂い、祿尚書の職を求め、更にまた尚書令となることを求めた時、裴頠とともに強硬に反対したのがもとで、倫にひどく怨まれて、ついに刑死させられることとなった。

こうした乱世にあつて、機雲兄弟もしばしば危難に遭遇する。趙王倫は帝位を篡奪するや、陸機を中書郎としたのであるが、これが機にとつては甚だ不都合なこととなった。趙王倫は帝位に就いて、わずか三か月余りで齊王冏をはじめとする諸王の反乱によつて帝位を失い、死を賜ることとなった。齊王冏は、機が中書に努めていたから、倫の下で、九錫文や禪位の詔に、必ずや機が関与しているであろうという嫌疑をかけたのである。その時に、機を救ってくれたのが呉王晏と成都王穎であつた。恩赦によつて機の命は救われたのである。

その後も混迷の続く西晋王朝にあつて、陸機は持ち前の才能とその名声をたのみ、世の混乱を正そうと考えていた。また弟の雲はそれを補佐していたのである。

政治の実権は趙王倫から齊王冏に移つたが、世の混迷は些かも改善されることはなかった。やがて太安元年(三〇二)、冏は恵帝の弟の長沙王乂によつて討たれてしまった。以後は、長沙王乂・成都王穎・河間王頤の三人が権力の中枢を構成することとなる。

時に機雲兄弟は、穎が機の命を救つたこともあり、あわせて穎の人柄が謙虚であり、穎ならば必ずや晋王室を興隆してくれるであろうという思いもあつて、その身を穎に委ねていた。穎は上表して雲

を清河内史とし、機を平原内史とした。穎は、斉王罔を討とうとして、雲を前鋒都督としたが、たまたま罔が殺されたので、雲は大將軍の右司馬に転じた。

しかし、機雲兄弟が信任していた成都王穎も、政治の実権を握るや、次第に驕慢となり、政治をおろそかにするようになった。そこで雲は、しばしば直言して御意に逆らっていた。例えば、穎に寵愛されていた宦者で黄門の孟玖が、自分の父親を邯鄲の令としようとした時、左長史の盧志らは皆な孟玖におもねりそれに賛成した。しかし雲は固くそれを認めず、「此の県は皆な公府の掾の資なり。豈に黄門の父、之に居ること有らんや」（この県の令には、すべて公府の役人になるのである。どうして黄門の孟玖の父が、この地位におろることができるのか）と言ったのでした。ために孟玖は雲を怨むこととなった。

やがて、長沙王乂・成都王穎・河間王顥の鼎立政権は、もろくも崩壊してしまつた。成都王穎は河間王顥と共に兵を挙げ、長沙王乂を討つたのである。この時、穎は陸機を後將軍・河北大都督に任命し、北中郎將の王粹は冠軍の牽秀らの諸軍二十余万人を、機の麾下に置いた。

太安二年（三〇三）八月、陸機は大軍を率いて朝歌を出発した。それから二か月後の十月、鹿苑で長沙王乂の軍と戦つたが、機の軍

は大敗し、七里澗に退いた。果たして敗軍の將となつた陸機は、軍中で処刑された。時に四十三歳であつた。

機が処刑されるや、弟の雲も捕らえられた。雲の捕縛を知つた成都王穎の属官である江統・蔡克・棗崇らは、穎に上疏して雲を救うように願つたが、穎は聞き入れることはなかつた。結局、雲を怨む孟玖が穎をせきたてて、雲を殺させたのである。時に雲は四十二歳であつた。

雲の弟の耽は、平東將軍の祭酒となり、兄同様に良き評判を得たのであつたが、雲とともに処刑された。大將軍の參軍であつた孫恵は、淮南の朱誕に手紙を送り、次のように言つた。

不意三陸、相携闇朝、一旦湮滅。道業淪喪。痛酷之深、荼毒難言。

意はざりき 三陸の、闇朝に相ひ携りて、一旦湮滅せんとは。道業は淪喪す。痛酷の深き、荼毒 言ひ難し。

州里の人々は、みなこのようにその死を悼み歎いたのであつた。

その後、東海王越は穎を伐つに当たり、天下に檄文を流したが、機雲兄弟を無実の罪で殺害したという罪状で、穎を非難したという。

陸雲の詩

今回は、陸雲の詩の中から「為顧彦先贈婦往返四首」を取り上げ、その内容を詳細に検討する（注④）。この往返の四首は、〈其二〉〈其三〉は顧彦先（注⑤）のためにその妻に贈る詩を、〈其二〉〈其四〉は顧彦先の妻のために夫に贈る詩を、それぞれ陸雲が代作したものである。『文選』巻二五には、「為顧彦先贈婦二首」として〈其二〉〈其四〉のみが収められている。しかし、詩の内容は婦から夫へ贈るものである。『玉台新詠』巻三では、「為顧彦先贈婦往返四首」として四首の詩を載せている。

為顧彦先贈婦往返四首（顧彦先の為に婦に贈る 往返四首）

〈其二〉

我在三川陽 我は三川の陽に在り
 子居五湖陰 子は五湖の陰に居る
 山河一何曠 山河 一に何ぞ曠き
 譬彼飛与沈 彼の飛と沈とに譬ふ
 目想清慧姿 目には清慧の姿を想ひ
 耳存淑媚音 耳には淑媚の音を存す
 独寐多遠念 独り寐ねて遠く念ふこと多く
 寤言撫空衿 寤めて言に空衿を撫す

彼美同懷子 彼の美しき同懷の子
 非爾誰為心 爾に非ずんば誰にか心を為さん

わたしは三川の北である洛陽に居り

そなたは五湖の南である呉に居る

（互いの間には）山や河がなんと遠く広がっていることよ

あたかも空を飛ぶ鳥と水に沈む魚（とが遠く懸け離れているかの）

ようである

わたしの目にはそなたの清らかでかしこい姿が想い浮かび

わたしの耳にはそなたの美しくやさしい声が残っている

独り寝の身では遠くそなたのことを思うことが多く

目が覚めては空しい衣の衿を撫でている

（わたしと）同じ思いでいるかの美しき人よ

そなたでなければ誰がわたしの心を慰めてくれようか

1 我在三川陽、子居五湖陰

〔三川陽〕「三川」とは洛陽を流れる河水・洛水・伊水をいう。陸機の「贈顧令文為宜春令」詩〔其四〕に、「三川已曠、江亦永矣」〔三川は已に曠かに、江も亦た永し〕とある。「陽」は北。川の北・山の南は「陽」で、川の南・山の北は「陰」となる。

〔五湖陰〕「五湖」とは太湖（呉の明湖）の別名。顧彦先は呉の人であるから、「五湖」というのである。「陰」は南。

2 山河一何曠、譬彼飛与沈

〔一何〕なんとまあ。陸機の「太山吟」に「太山一何高、迢迢造天庭」(太山一に何ぞ高き、迢迢として天庭に造る)、同じく「君子有所思行」に「塵里一何盛、街巷紛漠漠」(塵里一に何ぞ盛んなる、街巷は紛として漠漠たり) などとある。

〔飛与沈〕「飛」は飛鳥。「沈」は沈魚。洛陽にいる自分を飛鳥に、呉に残る妻を沈魚に譬え、二人が遠く隔たっていることを言う。陸機の「悲哉行」に「寤寐多遠念、緬然若飛沈」(寤寐に遠念多く、緬然として飛沈の若し) とある。

3 目想清慧姿、耳存淑媚音

〔清慧姿〕「清慧」とは、清らかで聡いこと。ここでは呉に残る妻のことをいう。「慧」字、『玉台新詠』は「恵」に作る。

〔淑媚音〕「淑媚」とは、淑やかで美しいこと。ここでは妻の声をいう。

4 独寐多遠念、寤言撫空衿

〔寐・寤〕「寐」は寝ること。「寤」は目が覚めること。二句は寝ても覚めても遠くに在る妻のことが思われることを言う。陸機の「苦寒行」に「離思固已久、寤寐莫与言」(離思は固に已に久しく、寤寐に与に言ふもの莫し) という表現がある。

〔遠念〕遠くに在る妻への思い。

〔空衿〕空しい衣の衿。妻が居ないことに対する思いを言う。

5 彼美同懷子、非爾誰為心

〔同懷子〕「懷おもひを同じくする子」。同じ思いでいる人。ここでは呉に在る妻を指す。陸機の「為顧彦先贈婦二首」(其二) に「脩身悼憂苦、感念同懷子」(身を脩おこむるも憂苦を悼いたみ、同懷の子を感念す) とある。なお陸機詩の此の句は、『文選』卷二二・謝靈運「登石門最高頂」詩の「惜無同懷客、共登青雲梯」(惜しむらくは同懷の客の、共に青雲の梯はしに登る無きを) の李善注に、「陸機詩曰」として引かれてる。

〔為心〕心を平静に保つこと。陸機「贈從兄車騎」詩に「翩翩游宦子、辛苦誰為心」(翩翩へんたる游宦の子、辛苦して誰か心を為なめん) と見える。

〈其二〉

悠悠君行邁	悠悠として君は行き邁 <small>ゆ</small> き
瑩瑩妾独止	瑩瑩 <small>けいけい</small> として妾は独 <small>ひと</small> り止 <small>とど</small> まる
山河安可踰	山河は安 <small>やす</small> んぞ踰 <small>こ</small> ゆ可 <small>べ</small> けん
永路隔萬里	永路 萬里を隔 <small>へだ</small> つ
京室多妖冶	京室には妖冶 <small>ようや</small> 多く
粲粲都人子	粲粲 <small>さんさん</small> たる都人子あらん
雅步擢纖腰	雅歩 纖腰 <small>せん</small> を擢 <small>ひ</small> き
巧笑發皓齒	巧笑 皓齒 <small>こうし</small> を發 <small>ひ</small> らく
佳麗良可美	佳麗 良 <small>まさ</small> に美なる可 <small>べ</small> し

衰賤焉足紀 衰賤 焉んぞ紀すに足らん

遠蒙眷顧言 遠く眷顧の言を蒙る

銜恩非望始 恩を銜むこと始めより望みしに非ず

はるばるとあなたは遠くに行き行かれ

わたしは独りでここに留まっています

(二人を隔てる)山や河をどうして越えて行くことができません

長き道は(二人を)万里も遠く隔てています

都には艶やかな美人が多く

きらびやかな都ぶりの女性がいることでしょう

雅やかに歩きながら品良く細い腰を引き

気を引く笑いは白い歯をのぞかせているのでしよう

その佳麗なるさまは本当に美しいことであり

この容貌の衰えた田舎者(のわたし)などはとても話にもなりま

せん

(それなのに)はるばると情けあるお言葉をいただきました

あなたの愛情を感じたのは始めから望んだことではありません

1 悠悠君行邁、瑩瑩妾独止

〔悠悠〕はるか遠くに行くさまをいう。『毛詩』小雅・黍苗に「悠悠南行、召伯勞之」(悠悠たる南行、召伯之を勞す)とあり、毛伝に

「悠悠は遠行の意」という。

〔行邁〕行き行くこと。『毛詩』王風・黍離に「行邁靡靡、中心摇摇」

(行き邁くこと靡靡たり、中心摇摇たり)、同じく『毛詩』小雅・

小旻に「如匪行邁謀、是用不得于道」(行き邁くに匪ずして謀るが

如く、是を用て道に得ず)などと見える。

〔瑩瑩〕身の抛る所が無く、助けの無いことをいう。『毛詩』唐風・

杕杜に「独行豈豈」(独り行きて豈豈たり)とある。〔豈〕は「瑩」

に同じ。

〔妾独止〕「妾」は顧彦先の妻の自称。わたしはひとりで只に留まっ

ている。

2 山河安可踰、永路隔萬里

〔山河〕呉と洛陽とを遮る多くの山や河。

〔永路〕呉と洛陽とを隔てる遠い道のり。

3 京室多妖冶、粲粲都人子

〔京室多妖冶〕「京室」とは都、ここでは洛陽を指す。「妖冶」は、

艶やかで美しい女性をいう。司馬相如の「上林賦」に「妖冶嫺都、

靚粧刻飾」(妖冶嫺都、靚粧刻飾)とある。

〔粲粲都人子〕「粲粲」はきらびやかな服をいう。『毛詩』小雅・大

東に「西人之子、粲粲衣服」(西人の子は、粲粲たる衣服す)とあり、

毛伝に「鮮盛なる貌なり」という。「都人子」は都ぶりの人。ここ

では田舎者とは違った都ぶりの女性をいう。『毛経』小雅・都人子

に「彼都人子、狐裘黄黄」（彼の都人子、狐裘黄黄たり）とある。

4 雅歩擢纖腰、巧笑発皓齒

〔雅歩擢纖腰〕「雅歩」は雅やかな都風の歩きかた。「纖腰」は細い腰。

〔擢〕は引く、抜き出す。此の字、『玉台新詠』は「擢」に作る。「雅歩は纖腰に擢かに」。

〔巧笑発皓齒〕「巧笑」愛らしい笑い顔。『毛詩』衛風・碩人に「巧笑倩兮、美目盼兮」（巧笑倩たり、美目盼たり）とある。「皓齒」は白い歯。曹植「洛神賦」に「丹脣外朗、皓齒内鮮」（丹脣は外に朗り、皓齒は内に鮮やかなり）とある。

5 佳麗良可美、衰賤焉足紀

〔佳麗良可美〕「佳麗」は都の美しき女性をいう。「美」字、『玉台新詠』は「羨」に作る。「良に羨む可し」（本当に羨ましいことでしょう）。

〔衰賤〕容色の衰えた身分賤しき人。ここでは妻が自分のことを言う。

6 遠蒙眷顧言、銜恩非望始

〔眷顧言〕情けに溢れた言葉。「眷顧」は情けをかけること。『毛詩』小雅・大東に「睠言顧之、漕焉出涕」（睠みて言に之を顧み、漕として涕を出す）とある。「睠」は「眷」に同じ。振り返り見ること。一句は、夫が洛陽から詩を贈ってきたことを言う。

〔銜恩〕愛情を抱くこと。陸雲の「答兄機詩」にも「銜恩恋行邁、

興言在臨觴」（恩を銜みて行き邁くを恋ひ、興きて言に觴に臨むに在り）と見える。

〔非望〕思い望んだことではない。『左氏伝』宣公十一年に「非所敢望也」（敢て望む所に非ざるなり）

〈其二〉

翩翩飛蓬征 翩翩として飛蓬征き
郁郁寒木榮 郁郁として寒木榮ゆ

遊止固殊性 遊止は固より性を殊にし
浮沈豈一情 浮沈は豈に一情ならんや

隆愛結在昔 隆愛は在昔に結び
信誓貫三靈 信誓は三靈を貫く

秉心金石固 心を秉ること金石のごとく固し
豈従時俗傾 豈に時俗に従ひて傾かんや

美目逝不顧 美目 逝くも顧みず
纖腰徒盈盈 纖腰 徒らに盈盈たり

何用結中款 何を用てか中款を結ばん
仰指北辰星 仰いで北辰星を指す

ひらひらと飛蓬のごとく（わたしは）転がり行き
松柏のごとく（そなたは）いつまでも美しい
旅行く者と家に留まる者とはもとより性質を異にし

浮かぶ者と沈む者とはその情は一つではない

二人の真の愛情は昔から結ばれており

二人の誠なる誓いは(天地人の)三霊をも貫いている

わたしが正しい心を保つことは金石のごとく固く

決して世俗の風に流されて傾いたりほしない

美しい目をした女性が通り過ぎても見向きもせず

細い腰つきの女性がいてもその美しさを空しくするばかり

何をもってかわたしの真心を結ぼうぞ

それはあの空で動くことのない北極星だと仰いで指さすのだ

1 翩翩飛蓬征、郁郁寒木栄

〔翩翩飛蓬征〕「翩翩」は、ひらひらと飛ぶさまをいう。『毛詩』小雅・

四牡に「翩翩者騅、烝然来思」(翩翩たる騅、烝然として来る)と

ある。「飛蓬」は、風に吹かれて転がる蓬。ここでは夫が自らを譬

えている。

〔郁郁寒木栄〕「郁郁」は、美しさにあふれるさま。「寒木」は冬に

も凋むことのない木。すなわち松や柏をいう。陸機の「戸郷亭」

詩に「秋草蔓長柯、寒木入雲煙」(秋草は長柯に蔓り、寒木は雲煙

に入る)と見える。一句は、妻がいつまでも変わることなく美し

いことに譬えている。

2 遊止固殊性、浮沈豈一情

〔遊止〕旅する者と家に留まる者。洛陽にいる夫と呉に留まる妻とをいう。

〔殊性〕性質が異なっている。

〔浮沈〕浮かぶ者と沈む者。「遊止」と同じく、遠く離れた夫と妻とをいう。

〔一情〕同じ心情。

3 隆愛結在昔、信誓貫三靈

〔隆愛結在昔〕「隆愛」は夫婦の厚い愛情。「在昔」は、いにしえ。

むかし。『毛詩』商頌・那に「自古在昔、先民有作」(古へ自り、在昔、先民作す有り)とある。陸機の「皇太子賜謙詩」にも「誕育皇儲

儀形在昔」(皇儲を誕育するに、在昔に儀形せり)と見える。

〔信誓貫三靈〕「信誓」は夫婦の誠の誓い。「三靈」は天地人。班固

の「典引」に「答三靈之藩祉、展放唐之明文」(三靈の藩祉に答へ、放唐の明文を展めん)とある。

4 秉心金石固、豈從時俗傾

〔秉心〕正しい心を保つこと。『毛詩』鄘風・定之方中に「匪直也人、

秉心塞淵」(直だに人なるのみに匪ず、心と秉ること塞淵)とあり、

毛伝に「秉は操るなり」という。

〔金石固〕金石のように固くて変わらない真心。『漢書』卷三四「韓

信伝」に「今足下雖自以為与漢王為金石之交、然終為漢王所禽矣」
 (今、足下は自ら漢王と金石の交はりを為すと以為ふと雖も、然れども終には漢王の禽とする所と為らん)とある。

5 美目逝不顧、織腰徒盈盈

〔美目〕美しい目をした女性。洛陽の美人をいう。『毛詩』衛風・碩人に「巧笑倩兮、美目盼兮」(巧笑倩たり、美目盼たり)とある。
 〔織腰〕細い腰つき。(其二)に「雅步擢織腰」(雅歩 織腰を擢く)とあるのを受けたもの。「美目」と同様に洛陽の美女をいう。
 〔徒盈盈〕「盈盈」は女の美しいさまをいう。「古詩十九首」(其二)に「盈盈楼上女、皎皎当窓牖」(盈盈たる楼上の女、皎皎として窓牖に当たる)とある。「徒盈盈」とは、夫が美人を相手にしないことを言う。

6 何用結中款、仰指北辰星

〔中款〕本心からの誠。妻に対する真心からの思いをいう。
 〔北辰星〕北極星のこと。北極星は同じ場所にあつて動くことはないことから、夫の妻に対する変わることはない愛情に譬えている。
 『論語』為政篇に「子曰、為政以德、譬如北辰居其所、而衆星共之」(子曰く、政を為すに徳を以てするは、譬へば北辰の其所に居て、衆星の之に共するが如し)とある。

〔其四〕

浮海難為水	遊林難為觀	容色貴及時	朝華忌日晏	皎皎彼姝子	灼灼懷春粲	西城善雅儻	綵章饒清彈	鳴簧發丹唇	朱絃繞素腕	輕裾猶電揮	雙袂如霞散	華容溢藻輻	哀響入雲漢	知音世所希	非君誰能讚	棄置北辰星	問此玄龍煥	時暮復何言	華落理必賤
海に浮かびては水を為し難く	林に遊びては觀を為し難し	容色は時に及ぶを貴び	朝華は日の晏きを忌む	皎皎たり 彼の姝子	灼灼たり 春を懷ふの粲	西城は雅儻を善くし	綵章は清彈し	鳴簧は丹唇より発し	朱絃は素腕を繞る	輕裾は猶ほ電の揮ふがごとく	雙袂は霞の散ずるが如し	華容は藻輻に溢れ	哀響は雲漢に入る	知音は世に希なる所	君に非ずんば誰か能く讚へん	北辰星を棄置して	此の玄龍の煥けるを問ふならん	時の暮れては復た何をか言はん	華の落つれば理として必ず賤しめられん

海に舟を浮かべて雄大な景色を觀れば川などは水とも認められな
くなり

林に遊べばちよつとした景色も取るに足らなくなる
女の容色はその盛りの時が大切であり

朝に咲いて暮れには散る（木槿むくげ）花は日の暮れるのを厭うもの
である

色白のあの美しい女の子たち

今を盛りの娘たちは良き連れ合いを望んで美しい
洛陽の西城の人たちは雅やかな舞が上手で

音楽処の総章には清らかに琴を弾く者が多くいる
笙の音は紅い唇から吹き鳴らされ

赤い絃の瑟は白い腕に抱えられて奏でられる
軽やかな裳裾もすそはあたかも稲妻の飛び散るようであり

左右の袂たもとはまるで霞の散るかようである
華やかな姿は美しい彩模様いろなまようの帷かたびらの中にあふれ

哀しげな調べは大空にも響かんばかりである
音楽をよく理解する人はこの世には稀なるもの

あなたでなければ誰が讚えることができましょう
（あなたは）北辰星への誓いなどは捨て置いて

あの玄龍星のごとき輝ける美人たちをお尋ねになるのでしょう
年を経た今となつてはもう何も言いません

花は落ちれば当然のこととして貶められるものですから

1 浮海難為水、遊林難為觀

〔浮海難為水〕海は百川の帰一する所であるから、海を見れば一水
などは取るに足らないという意。『孟子』尽心篇上に「觀海者、難
為水」（海を觀る者は、水を為し難し）とあるのに拠る。ここでは、
洛陽で多くの美人を見ていたら、少々の美人などは気にならない
ことに譬えている。

〔遊林難為觀〕林の中で遊覧すれば、ちよつとした景色も物足りな
くなるという意。上句と同様に、洛陽で多くの美人を夫は目にし
ているであろう、と妻が想像しているのである。

2 容色貴及時、朝華忌日晏

〔容色貴及時〕女の色つやはその盛りの時を失わないのが大切であ
る、の意。

〔朝華忌日晏〕「朝華」は木槿をいう。木槿の花は朝に開き、夕暮れ
には散る。

3 皎皎彼姝子、灼灼懷春榮

〔皎皎彼姝子〕「皎皎」は明るく清らかなさま。「古詩十九首」〈其二〉
に「盈盈楼上女、皎皎当窓牖」（盈盈たる楼上の女、皎皎として窓
牖に当たる）とある。「姝子」は従順で美しい娘。『毛詩』鄘風・
干旄に「彼姝者子、何以畀之」（彼の姝たる者は子、何を以てか之
に畀あたへん）とあり、毛伝に「姝は順なる貌」、集伝に「姝は美なり」

という。

〔灼灼懷春粲〕「灼灼」は、花が今を盛りと美しく咲くさま。『毛詩』周南・桃夭に「桃之夭夭、灼灼其華」（桃の夭夭たる、灼灼たり其の華）とあり、毛伝に「灼灼は、華の盛んなるなり」という。「懷春」とは、娘が年頃になつて婚姻を願うことをいう。『毛詩』召南・野有死麕に「有女懷春、吉士誘之」（女有り春を懷ふ、吉士は之を誘ふ）とある。「粲」は、美しいこと。『毛詩』唐風・綢繆に「今夕何夕、见此粲者」（今夕は何の夕べぞ、此の粲者を見る）とあり、集伝に「粲は美なり」という。

4 西城善雅舞、総章饒清弾

〔西城善雅舞〕「西城」は洛陽の西北隅にあつた金墉城。晋の時、魏の宮人らが置かれていた。李善注に引く陸機『洛陽記』に「金墉城在宮之西北角。魏故宮人皆在中」（金墉城は宮の西北の角に在り。魏の故の宮人は皆な中に在り）とあり、同じく崔豹の『古今注』に「魏文帝宮人尚衣、能歌舞、一時冠絶」（魏の文帝の宮人・尚衣は、能く歌舞し、一時に冠絶たり）とある。

〔総章〕当時の楽官・楽妓の詰所。李善注に引く孫盛の『晋陽秋』に「其総章技、即古之女楽」（其の総章の技とは、即ち古への女楽なり）とある。

5 鳴簧発丹唇、朱絃繞素腕

〔鳴簧発丹唇〕「鳴簧」は笙の笛。「丹唇」は紅を引いた赤い唇。曹植「洛神賦」に「丹脣外朗、皓齒内鮮」（丹脣は外に朗り、皓齒は内に鮮やかなり）とある。また、陸機の「日出東南隅行」に「丹脣含九秋、妍迹陵七盤」（丹脣は九秋を含み、妍迹は七盤を陵ぐ）と見える。一句は、口紅を差した美しい楽人が笙を吹いていることを言う。

〔朱絃繞素腕〕「朱絃」は朱色の琴の絃。朱の練り絹で作られた。『礼記』楽記に「清廟之瑟、朱絃而疏越」（清廟の瑟は、朱絃にして疏越）とある。「素腕」は楽人の美しい白い腕。この腕に抱えられた瑟が演奏されていることを言う。

6 輕裾猶電揮、雙袂如霞散

〔輕裾猶電揮〕軽やかな裳裾はあたかも稲妻の飛び散るように翻る、の意。「電」は雷、いならずま。

〔雙袂如霞散〕左右の二つの袂は、まるで霞の散るかのようにかざされている、の意。「霞」字、本集・『文選』は「霧」に作るが、今は『玉台新詠』に従う。

7 華容溢藻幄、哀響入雲漢

〔華容溢藻幄〕「華容」は美しい姿。『楚辞』招魂に「蘭膏明燭、華容備些」（蘭膏の明燭には、華容備はる）とあり、集伝に「華容は、

美人を謂ふなり」という。「藻幄」は美しく飾られたとばり。

〔哀響入雲漢〕「哀響」は哀調を帯びた音色。「雲漢」は天の河。『毛詩』大雅・棫樸に「倬彼雲漢、為章于天」(倬たる彼の雲漢は、章を天に為す)とあり、毛伝に「雲漢は、天河なり」という。

8 知音世所希、非君誰能讚

〔知音世所希〕「知音」は音楽をよく解する人。『呂氏春秋』本味篇に見える伯牙と鍾子期のご事に拠る。「古詩十九首」(其五)に「不惜歌者苦、但傷知音稀」(歌ふ者の苦しみを惜はず、但だ知音の稀なるを傷む)とある。

9 棄置北辰星、問此玄龍煥

〔棄置北辰星〕「棄置」は、打ち捨てること。〈其三〉に「何用結中款、仰指北辰星」(何を用てか中款を結ばん、仰いで北辰星を指す)とあり、夫が北辰星を指して真心の誓いを結ぼうというのに対し、妻の方は夫がその誓いを打ち捨ててしまおうのではないかと、と自らの不安な心情を吐露している。

〔玄龍煥〕「玄龍」は軒轅星のこと。龍の形をしていることから美人に譬えられる。ここでは、洛陽の美しき楽人たちを指している。

10 時暮復何言、華落理必賤

〔時暮復何言〕「時暮」は、年老いて容貌の衰えることを言う。「復

何言」三字、『玉台新詠』は「勿復言」(復た言ふこと勿かれ)に作る。

〔華落〕容姿の衰えたことを言う。『毛詩』衛風・氓の詩序に「華落色衰、相棄背」(華落ち色衰ふれば、相ひ棄背す)とある。

おわりに

鍾嶸の『詩品』では、陸機を潘岳・張協・左思らとともに「上品」に位置づけ、次のように評している。

其源出於陳思。才高辭贍、拳體華美。氣少於公幹、文劣於仲宣。

尚規矩、不貴綺錯、有傷直致之奇。然其咀嚼榮華、厭飮膏沢、文章之淵泉也。張公歎其大才、信矣。

其の源は陳思に出づ。才は高く辞は贍かにして、拳體華美なり。氣は公幹より少なく、文は仲宣より劣る。規矩を尚びて、綺錯を貴ばず、直致の奇を傷ふ有り。然れども其の榮華を咀嚼し、膏沢を厭飮するは、文章の淵泉なり。張公、其の大才を歎ずるは、信なり(注⑥)。

すなわち、「陸機の詩は陳思王曹植に源流を發している。その文才は高く表現は豊かであり、文学の本質は華美なものである。文章の生氣は劉楨(字は公幹)よりも少なく、文飾は王粲(字は仲宣)よりも劣っている。過去の文学の規範を尊重し、綺なる変革を貴ぶこ

とがなかったために、奇抜な独自性を損なうこととなった。しかし、(陸機の詩は)過去の文学の精華を十分に吸収し、芳醇な艶やかさを撰取しているのは、まさに文章の淵泉(文学における包容力)なのである。張華が陸機の大才を嘆じたのは、もつともなことである」という。

また陸雲は、張華や張翰・潘尼・石崇らとともに「中品」に位置づけられ、次のように評されている。

清河之方平原、殆如陳思之匹白馬。於其哲昆、故称二陸。
清河の平原に方ぶるは、殆んど陳思の白馬に匹ぶるが如し。其の哲昆に於いて、故に「二陸」と称す。

すなわち、「陸雲を陸機と比較するのは、ほとんど曹植を曹彪に比べるようなものである。優れた兄のお蔭によって、『二陸』と称されるのである」と言う。「清河」とは、成都王穎のもとで清河内史となった陸雲を指し、「平原」とは同じく平原内史であった陸機を指す。「陳思」は陳思王曹植、「白馬」は曹植の異母兄弟であった白馬王曹彪をいう。陸雲は、兄の陸機が高く評価されることによつて「二陸」と併称されるようになったと劉勰は言うのである。確かに陸機は「上品」に、陸雲は「中品」に位置づけられており、曹植が「上品」に置かれるのに対し、曹彪は「下品」に置かれている。

ところで「二陸」の称は、『晋書』卷五四「陸雲伝」にも、

雲字士龍、六歲能属文。性清正、有才理。少与兄機齐名、雖文章不及機、而持論過之、号曰「二陸」。

雲字は士龍、六歳にして能く文を属する。性は清正にして、才理有り。少くして兄の機と名を齊しくし、文章は機に及ばずと雖も、持論は之に過ぎ、号して「二陸」と曰ふ。

と記述されている。

こうした評価が下された根拠は何か、それを探るには今日に残された陸機・陸雲の詩をすべて詳密に読解しなくてはならない(注⑦)。今後、陸雲の詩を丹念に読み進め、陸雲詩の評価についての検討をしたい。

【注】

- ① 佐藤利行『陸雲研究』(白帝社)を参照。
- ② 佐藤利行『西晋文学研究』(白帝社)を参照。
- ③ 『晋書』陸雲伝には、次のような逸話も見えている。

機初詣張華。華問、「雲何在」。機曰、「雲有笑疾。未敢自見」。俄而雲至。華為人多姿制。又好帛繩纏鬚。雲見而大笑、不能自已。

機は初め張華に詣る。華問ふ、「雲は何くに在るか」と。機曰く、

「雲には笑疾有り。未だ敢て自ら見えず」と。俄にして雲至る。華は人と為り姿制多し。又た帛の繩もて鬚を纏ふを好む。雲は見て大いに笑ひ、自ら已むこと能はず。

すなわち、張華が格好をつけて、そのうえ絹ひもであごひげをくくっているのを見て、陸雲は思わず大笑いし、自制できなかつたという。

④ テキストは中国古典文学基本叢書『陸雲集』（中華書局）を用い、『文選』『玉台新詠』等を参考にした。

⑤ 顧彦先については、『晋書』卷八六「顧榮伝」に次のようにある。

顧榮、字彦先。吳国呉人也。為南土著姓。祖雍、吳丞相。父穆、宜都太守。榮機神朗悟、弱冠仕呉、為黃門侍郎、太子輔義都尉。呉平、与陸機兄弟同入洛。時人号为三俊。

顧榮、字は彦先。呉国・呉の人なり。南土の著姓為り。祖は雍、呉の丞相たり。父は穆、宜都太守たり。榮は機神朗悟、弱冠にして呉に仕へ、黄門侍郎、太子輔義都尉と為る。呉の平ぐや、陸機兄弟と同一洛に入る。時人は号して三俊と為す。

⑥ 『晋書』卷五四「陸機伝」には、次のようにある。

機天才秀逸、辞藻宏麗。張華嘗謂之曰、「人之為文、常恨才少、而子更患其多」。

機は天才秀逸、辞藻宏麗たり。張華は嘗て之に謂ひて曰く、「人の文を為るや、常に才の少なきを恨むに、而るに子は更に其の多きを患ふ」と。

⑦ 陸機の詩については、佐藤利行『陸士衡詩集』（白帝社）を参照。

Lu Yun poetry study

Toshiyuki SATO and YAN Jinzhong

Key Words: Lu Yun, Lu Ji, two Lu, Western Jin dynasty literature, Guan Yanxian

Lu Yun (262–303 CE), known as one of the “two Lu,” along with his elder brother Lu Ji, was a poet whose works were representative of China’s Western Jin dynasty. Zhong Rong (鍾嶸), in his “Criticism of Poetry” (*shīpīn*, also known as “Grades of Poetry”), evaluated Lu Yun’s poetry as being of “middle rank,” along with the other contemporary poets such as Zhang Hua (張華), Zhang Han (張翰), Pan Ni (潘尼), and Shi Chong (石崇). Zhong Rong made the following disparaging statement about Lu Yun: “Comparing Lu Yun to Lu Ji is almost the same as comparing Cao Zhi to Cao Biao. The only reason people call them “two Lu” is because they are brothers.”(清河之方平原、殆如陳思之匹白馬。於其哲昆、故称二陸。) What aspect of the poems of Lu Yun drew such fierce criticism, leading critics to dismiss them as being below the first rank? To answer this question, one must first make a careful, detailed analysis of Lu Yun’s poems in their entirety. This paper presents a close examination of Lu Yun’s collection of poems titled *Four Epistles for send and reply, made for Guan Yanxian and his wife* (為顧彥先贈婦往返四首).